

第7回公認心理師国家試験

分析速報

2024年3月7日 河合塾 KALS

2024年3月3日（日曜日）に、第7回公認心理師国家試験が行われた。本資料では、第7回公認心理師国家試験の出題形式・出題内容・問題の難易度等を、過去の公認心理師国家試験と比較しながら徹底分析する。

1. 基本情報

- 試験時間・問題数は、全て第6回までを踏襲。
 - ・午前の部（10時～12時）、午後の部（13時半～15時半）各120分の2部構成。
 - ・第5回試験までは、マークシート用紙は塗りつぶす①～⑤が横にならんでいる用紙Aと①～⑤が縦にならんでいる用紙Bのいずれかが渡されていた。しかし第6回試験からは、塗りつぶす①～⑤が横にならんでいる用紙に統一され、今回も同様であった。
 - ・試験開始60分後から終了10分前までは途中退室可。状況によっては途中退室ができない場合もある。
- 解答形式は、5肢択一（5つの選択肢から1つを選ぶ形式）、4肢択一（4つの選択肢から1つを選ぶ形式）、5肢択二（5つの選択肢から2つを選ぶ形式）の3種類。5肢択二問題は、選んだ2つの選択肢が両方とも正解していなければ得点にならない。第7回試験については、おおよそ例年通りの出題数であった。

表1 解答形式比較

	第3回試験	第4回試験	第5回試験	第6回試験	第7回試験
5肢択一	114題	124題	119題	123題	117題
4肢択一	19題	18題	14題	13題	16題
5肢択二	21題	12題	21題	18題	21題

（第2回試験までは省略。以下全ての表にて同様）

- 不適切な選択肢を選ぶ問題が、特定の番号帯に固めて配置されている点も第6回試験までと同様。例えば、第7回試験の午前問題の35番～42番は、すべて不適切な内容の選択肢を選ぶ問題である。さらに「不適切なものを選びなさい」と問題文に下線が引いてある点も第6回試験までと同様。問題数は以下の表2の通り。試験を経るたびに不適切な選択肢を選ぶ問題は減少傾向にあったが、第7回試験では第5回試験と同等の出題数に戻った。

表2 選択内容比較

	第3回試験	第4回試験	第5回試験	第6回試験	第7回試験
適切選択	115 題	115 題	127 題	133 題	127 題
不適切選択	39 題	39 題	27 題	21 題	27 題

※適切選択…「正しいものを選びなさい」「最も適切なものを選びなさい」などの形式。
 ※不適切選択…「誤っているものを選びなさい」「最も不適切なものを選びなさい」などの形式。

- 午前・午後ともに一般問題 58 題のあとに 19 題の事例問題という構成。つまり、一般問題は午前と午後合わせて $58 \times 2 = 116$ 題、事例問題は午前と午後合わせて $19 \times 2 = 38$ 題となる。1 つ 1 つの事例の文章の長さは 10 行前後。

表3 一般問題・事例問題比較

	第3回試験	第4回試験	第5回試験	第6回試験	第7回試験
一般問題	116 題	116 題	116 題	116 題	116 題
事例問題	38 題	38 題	38 題	38 題	38 題

- 第7回試験の配点予想は表4の通り。第6回までと同様に一般問題 1 点・事例問題 3 点という配点ならば 230 点満点となる。なお合格ラインは総得点の 60%程度と日本心理研修センターから発表されており、これまでの試験においては、第4回・第5回試験を除き合格点は 138 点 (60%)、第4回試験は 143 点 (62.2%)、第5回試験は 135 点 (58.7%) であった。

表4 予想配点

	配点	問題数	総得点
一般問題	1 点	116 題	116 点
事例問題	3 点	38 題	114 点
合計	—	154 題	230 点

2. ブループリントとの対応

第7回試験の全ての問題について、どの大項目に相当するか判定し、まとめたものが以下の表5である（各問題の判定は、巻末資料を参照）。

表5 ブループリント大項目の分類比較

	内容	出題数	公表出題数	比較
①	公認心理師としての職責の自覚	8 題	9.2 題 (6%)	▲ 1.2
②	問題解決能力と生涯学習			
③	多職種連携・地域連携			
④	心理学・臨床心理学の全体像	2 題	4.6 題 (3%)	▲ 2.6
⑤	心理学における研究	4 題	3.1 題 (2%)	△ 0.9
⑥	心理学に関する実験	3 題	3.1 題 (2%)	▲ 0.1
⑦	知覚及び認知	5 題	3.1 題 (2%)	△ 1.9
⑧	学習及び言語	4 題	3.1 題 (2%)	△ 0.9
⑨	感情及び人格	1 題	3.1 題 (2%)	▲ 2.1
⑩	脳・神経の働き	5 題	3.1 題 (2%)	△ 1.9
⑪	社会及び集団に関する心理学	5 題	3.1 題 (2%)	△ 1.9
⑫	発達	10 題	7.7 題 (5%)	△ 2.3
⑬	障害者（児）の心理学	4 題	4.6 題 (3%)	▲ 0.6
⑭	心理状態の観察及び結果の分析	11 題	12.3 題 (8%)	▲ 1.3
⑮	心理に関する支援	13 題	13.9 題 (9%)	▲ 0.9
⑯	健康・医療に関する心理学	9 題	13.9 題 (9%)	▲ 4.9
⑰	福祉に関する心理学	13 題	13.9 題 (9%)	▲ 0.9
⑱	教育に関する心理学	10 題	13.9 題 (9%)	▲ 3.9
⑲	司法・犯罪に関する心理学	7 題	7.7 題 (5%)	▲ 0.7
⑳	産業・組織に関する心理学	9 題	7.7 題 (5%)	△ 1.3
㉑	人体の構造と機能及び疾病	9 題	6.2 題 (4%)	△ 2.8
㉒	精神疾患とその治療	8 題	7.7 題 (5%)	△ 0.3
㉓	公認心理師に係る制度	13 題	9.2 題 (6%)	△ 3.8
㉔	その他	1 題	3.1 題 (2%)	▲ 2.1

※各問題がどの大項目に相当するかに関する判定については、河合塾 KALS 独自の判定であり、日本心理研修センターより発表されたものではない。複数の領域にまたがる問題は、問題の並びやブループリントに記載のキーワードが問題文や選択肢文中にあるか否かを判定基準とした。

※「比較」については、出題数と公表出題数の差が2以上離れている部分に色を付けた。

第6回公認心理師試験で「大項目①～③ 公認心理師の職責」が9%から6%に、「大項目⑮ 心理に関する支援」が6%から9%にそれぞれ変更になった。そして第6回試験はもちろんのこと、今回行われた第7回試験においても、変更された出題割合が反映された形で出題されていた。それは、第5回試験までと比較して「公認心理師の職責」に関する問題は減り、「心理に関する支援」に関する問題は増えたことを意味する。

では「大項目⑮ 心理に関する支援」において、どのような問題が出題されたのだろうか。例えば、問20では日本独自の心理療法である内観療法が出題された。また、昨年の第6回試験では、従来の試験では出題がほとんどなかった精神分析に関する問題が出題され、今回の第7回試験でも問140で出題された。精神分析については大項目⑮以外でも、問60でM. S. Mahlerの分離個体化理論、問80でD. W. Winnicottの移行対象が出題されており、明らかに過去の公認心理師試験と比較して、精神分析の出題が増加傾向にある。従来の公認心理師試験対策において、精神分析的アプローチの優先度が高いとは言えなかったが、この考え方は過去のものになったと言えるだろう。

他の特徴としては、まず「大項目⑨ 感情及び人格」の出題が少なかったことが挙げられる。特に、パーソナリティ心理学（人格心理学）に関する出題が無かった。過去の試験で頻出であるパーソナリティ障害の出題もなかった。また、「大項目⑱ 教育に関する心理学」の出題も少なかった。特にスクールカウンセリングの現場に関わる事例問題は、従来の試験と比較して少なかったように思われる。

一方で、第7回試験では医学系問題の出題の増加がみられた。特に「大項目⑩ 脳・神経の働き」「大項目㉑ 人体の構造と機能及び疾病」の出題が多かった。具体的には、問12で視床の機能（心理学では「視床下部」が注目されることが多いが、今回の出題は「視床」であった）、問28で該当する臓器を答える問題、問98で緊張型頭痛に関する問題、問100で細菌が原因で起こる感染症に関する問題など、単に「心理学」を学んでいるだけでは対応が難しい問題が多数出題された。なお「大項目⑯ 健康・医療に関する心理学」の出題が少ないことと関連づけると、出題者側が大項目⑯として用意した問題に、脳・神経、人体の構造と機能に関わりのある問題が多かったのかもしれない。そのため本来は大項目⑯として作成された問題も、本分析では大項目⑩や㉑にあてがわれた可能性がある。なおこのことは「大項目㉓ 公認心理師に関する制度」も同様で、本来は別の大項目として作成された問題も、問題の主体が法律であるが故に、大項目㉓として分類されている可能性が十分にある。

このように、出題の偏りはあるものの、どの問題をどの大項目に分類したかによって生じる誤差を加味すると、第7回試験も従来の公認心理師試験と同様に、ブループリントで公表されている出題割合に沿う形で試験が作られていた、と考えるべきだろう。

3. 第7回試験の難易度

第7回試験の各設問の難易度を以下の3段階で判定した。なお、この判定基準および、各設問の難易度の判定は河合塾 KALS 独自のものであり、日本心理研修センターが発表したものではない。

- ✧ 難易度A…5つの中から完全にランダムで選ばざるを得ない難問。
- ✧ 難易度B…正解の選択肢を2つまたは3つまで絞り込むことが出来る問題。
- ✧ 難易度C…比較的正解を1つに絞り込みやすい問題。

※上記の基準で難易度判定をしているため、キーワードとして難しい内容であったとしても明らかに不正解の選択肢を除外して2択（3択）で勝負できるなら難易度B、選択肢の中に難しい内容があったとしても、明らかに正しいと判断できる選択肢が1つあるならば難易度Cと判定している。

以上の基準で第7回試験全154題の判定を行った。その集計結果が以下の表6である（各問題の難易度判定については本資料の巻末参照）。

表6 問題の難易度（第7回試験）

難易度	午前	午後	全体
A	8 題 10.4%	13 題 16.9%	21 題 13.6%
B	40 題 51.9%	29 題 37.7%	69 題 44.8%
C	29 題 37.7%	35 題 45.5%	64 題 41.6%

この表6からもわかるように、今回の第7回試験は、午前と午後で難易度の“質”が異なっていた。

午前は問1で個人情報の取扱に関するキーワードがいきなり出題され、出鼻を挫かれた受験生も多かったであろう。このような出題は過去に第5回試験においても見られ、まずはここで立て直して、取れる問題で正解を積み重ねていくことが重要になる。しかし、午前の問題は難易度A問題のような「お手上げ問題」は少ないものの、難易度B問題のような「合っているか間違っているか、確証が持てない問題」が続くことになる。よって、不確定さを抱えながら問題を解き続けることになるため、負担に感じた受験生もいたことだろう。実際、試験後の意見としては「午前の問題が難しかった」という声が多かったようである。

一方で午後は難易度 A 問題が多く、単純に正解を引き当てることが難しい問題が散見される。ただ、このような問題は「捨て問」と割りきりやすく、また午後の問題の方が、比較的正解しやすい難易度 C 問題が多かったため、人によっては午後の方が取り組みやすいと感じたかもしれない。

4. 事例問題の難易度

次に、一般問題と事例問題の難易度を以下の表 7 で比較する。

表 7 一般問題と事例問題の難易度比較（第 7 回試験）

難易度	一般	事例	全体
A	20 題 17.2%	1 題 2.6%	21 題 13.6%
B	51 題 44.0%	18 題 47.4%	69 題 44.8%
C	45 題 38.8%	19 題 50.0%	64 題 41.6%

表 7 から明らかなように、一般問題よりも事例問題の方が、A 問題は少なく C 問題が多い。そのため、これまでの公認心理師試験対策で鉄板とされている事例問題で点数を稼ぐ戦略が、今回の第 7 回試験においても重要だったことがわかる。

そこで次は、事例問題の難易度の推移を見てみよう。第 3 回試験から比較したものが以下の表 8 である。

表 8 事例問題の難易度比較（第 3 回～第 7 回）

難易度	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回
A	0 題 0.0%	2 題 5.3%	4 題 10.5%	0 題 0.0%	1 題 2.6%
B	15 題 39.5%	12 題 31.6%	13 題 34.2%	21 題 55.3%	18 題 47.4%
C	23 題 60.5%	24 題 63.2%	21 題 55.3%	17 題 44.7%	19 題 50.0%

表8を見ると、やや事例問題の難易度 C 問題が減少傾向にあることが見受けられる。この背景には、事例文を読めば特別な知識がなくても正解できるタイプの問題が減り、事例に対応する用語名を答えるタイプの出題が増加傾向にあることが関連している（このあたりは、後述の出題分野別の講評も参照）。特に第6回試験では、あてはまる病態名、あてはまる心理検査名を答える問題が多く出題されたが、その傾向は第7回試験においても見られた。よって、事例問題の攻略といえども知識が必要であることは間違いないだろう。

また、事例文の長さも過去の試験と比較して増加傾向にある。以下の図1は、第4回～第7回試験で「事例問題の行数」を比較したものである。（なお、事例問題の行数は、事例文+問題文でカウントしており、選択肢の行数はカウントしていない）

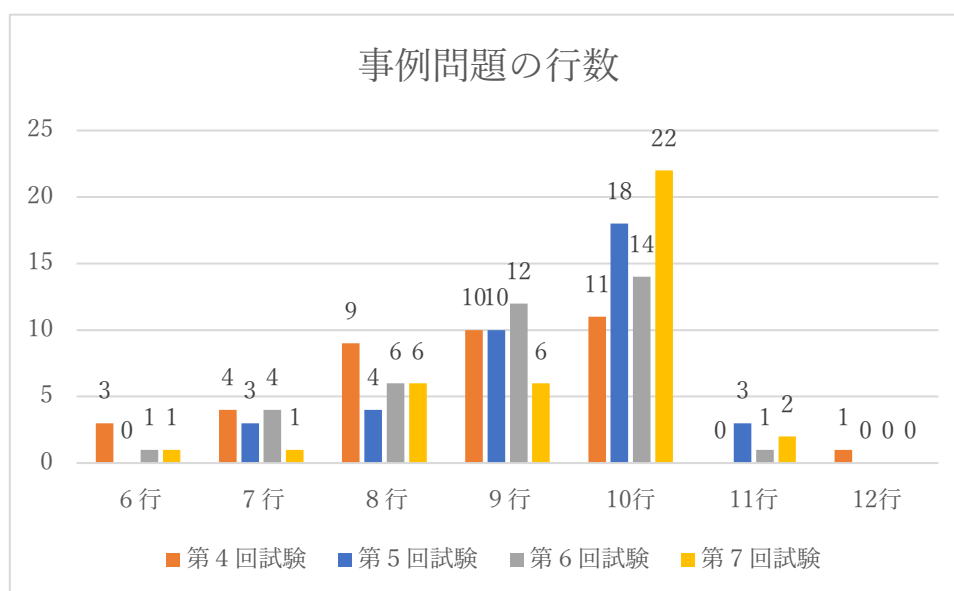


図1 事例問題の行数（第4回試験～第7回試験の比較）

※グラフ上部の値は出題数

上図から、事例問題の行数が増加傾向にあることが見てくるだろう。特に第7回試験では10行の事例問題が「標準」となっているようである。そのため、事例問題で点数を稼ぐためには、事例文を最後まで丁寧に読み取り、身につけてきた知識と照合する、というプロセスが重要と考えられる。

例えば、今回の試験で出題された以下の事例問題を見てみよう。

問 66 29歳の女性 A，学校教員。両親に連れられて総合病院精神科を受診した。同居の両親によると，A は，1 週間前の夜，長年交際してきた同僚の男性 B から別れを告げられた。翌朝，険しい表情でリビングに現れた A は，なぐさめる両親に対して激しく興奮し，その日から仕事を休んでいる。自宅では，「B の声が聞こえる」と言って騒いだり，「B が迎えに来た」と言って誰もいない玄関に飛び出したり，落ち着かない状態が続いた。外来でも A は，「診察室に生徒がいる」と言って混乱した様子を見せた。入院治療となり，2 週間程度でこれらの症状は消失した。その後は安定した状態が続いている。

A の病態の理解として，最も適切なものを 1 つ選べ。

- ① 統合失調症
- ② パニック症
- ③ 妄想性障害
- ④ 短期精神病性障害
- ⑤ 心的外傷後ストレス障害

まず事例文で目につくのは「B の声が聞こえる」という幻聴らしき表現や，「B が迎えに来た」「診察室に生徒がいる」という妄想のような表現である。このような幻聴や妄想の表現だけから，選択肢① 統合失調症を選んでしまった受験生がいるかもしれない。しかし最後まで事例文を読むと「入院治療となり，2 週間程度でこれらの症状は消失した」とある。そのため今回の正解は，選択肢④ 短期精神病性障害と考えられる。

以上のように，①事例文を最後まで読んで情報を集めること，②集めた情報と学んできた知識を照合すること，この 2 点が，事例問題攻略のカギとなったと言える。

過去の試験の事例問題では，十分なアセスメントがないまま不用意に介入を進めたり，他職種と連携しないままスタンドプレイで対応を進めたり，一方的な決めつけがあったりして，比較的容易に正解（あるいは不正解）を選ぶことが可能な問題が多かった。近年の試験ではこのような「表現」に注目して解ける問題は減り，ある程度「知識」がないと対応できない問題が増えている。事例問題攻略のために，幅広く知識を得ておくことが必要と言えるだろう。

5. 得点シミュレーション

次に第7回試験について、以下の設定で行った得点シミュレーションを紹介する。

- ・第7回試験の配点を従来と同様、一般問題1点・事例問題3点と想定。
- ・難易度A問題は、正解率20%（多くが五肢択一のため、正解率5分の1と想定）
難易度B問題は、正解率50%（選択肢を2つまで絞り込めたと想定）
難易度C問題は、正解率80%（ミスしなければ正解できると想定）とする。

表9 第7回試験得点シミュレーション

種別	難易度	第7回試験	
		問題数	予想得点
一般問題 (1点)	A (×0.2)	20 題	4.0 点
	B (×0.5)	51 題	25.5 点
	C (×0.8)	45 題	36.0 点
事例問題 (3点)	A (×0.2)	1 題	0.6 点
	B (×0.5)	18 題	27.0 点
	C (×0.8)	19 題	45.6 点
予想得点		138.7 点	

表9によれば、第7回試験において難易度C問題を確実に得点し、難易度B問題を二択まで絞り込めれば、難易度A問題が完全に運任せでも138.7点となる。合格ラインを138点（60%）と考えた場合、何とか合格ラインに届く事になる。難易度C問題をより確実に得点し、難易度B問題で二択に絞り込んだ後の正解率を50%以上に上げることができれば、より安定して合格ラインに乗ることができるだろう。

よって、難易度A問題ではなく、難易度B問題・難易度C問題でいかに得点を稼ぐことができるかが、合格の決め手になる。これは第6回試験までと変わらず、公認心理師試験に一貫した特徴と言える。

6. 過去試験との比較

次に、第7回試験の難易度を、第6回試験までと比較した。それが以下の表 10 である。また、難易度の推移をグラフに表したものが図 2 である。

表 10 各回別の難易度比較

難易度	第 3 回	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回
A	26 題 16.9%	23 題 14.9%	23 題 14.9%	16 題 10.4%	21 題 13.6%
B	66 題 42.9%	60 題 39.0%	70 題 45.5%	78 題 50.6%	69 題 44.8%
C	62 題 40.3%	71 題 46.1%	61 題 39.6%	60 題 39.0%	64 題 41.6%

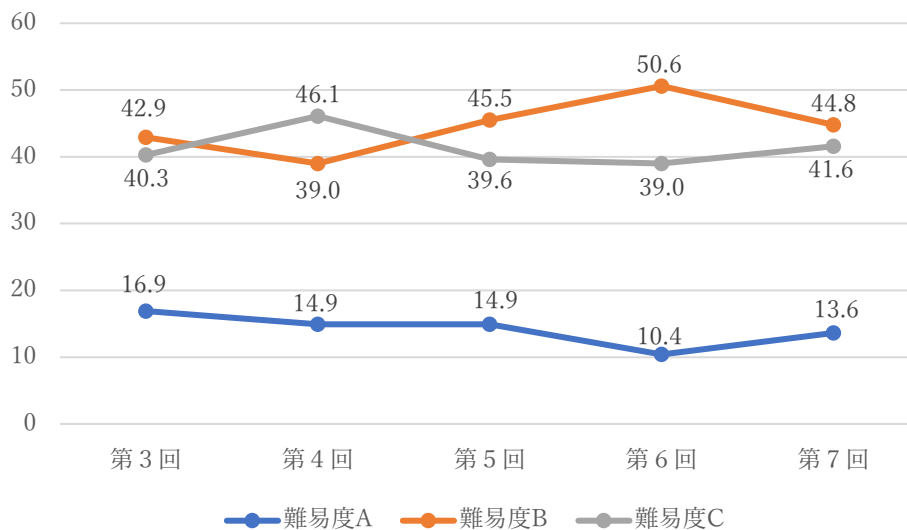


図 2 公認心理師試験 各回の難易度推移 (単位：%)

難易度 B 問題が増加傾向にあったがその傾向に歯止めがかかり、第 6 回試験と比較して、難易度 A 問題と難易度 C 問題が増加した。難易度 C 問題のように正解を選びやすい問題は気分の高揚が期待でき、難易度 A 問題はある意味「捨て問」として割り切りやすい。そういう意味では、比較的取り組みやすい試験と言えたのかもしれない。(実際に受験した者は、試験の緊張感からなかなかそうは思えなかったと予想されるが。)

また、過去の試験と比較すると、選択肢が「単語」の問題が増えた印象がある。そこで、第 4 回試験から第 7 回試験まで、選択肢が「単語」で示されている問題の数をカウントした。

それらをまとめたものが以下の表 11 である。

表 11 選択肢が「単語」の問題数

「単語」の問題	第 4 回	第 5 回	第 6 回	第 7 回
全体 (全 154 題)	51 題 33.1%	61 題 39.6%	86 題 55.8%	95 題 61.7%
事例 (全 38 題)	15 題 39.5%	18 題 47.4%	23 題 60.5%	24 題 63.2%

どのような問題について「単語」とみなしたかは、以下の例を参照してほしい。

<選択肢が「単語」の例>

問 1 個人情報取扱事業者が、個人データの第三者提供を行うために、あらかじめ本人の同意を得ることを表す用語として、最も適切なものを 1 つ選べ。

- ① オプトイン ② プライバシー ③ エナクトメント
④ リフレクション ⑤ アカウンタビリティ

<選択肢が「文章」の例>

問 20 内観療法における集中内観について、最も適切なものを 1 つ選べ。

- ① 日中は軽作業に取り組む。
② 日常生活の中で集中して取り組む。
③ 日々、他のクライアントたちとの対話を通して、記憶をより鮮明にする。
④ 過去から現在までの対人関係を、一定期間に区切りながら、思い出していく。
⑤ 自分自身が「してもらったこと」、「して返したこと」及び「して返したいこと」という 3 つのテーマが設定されている。

なお、以下の問 12 のような「……の……」というタイプの選択肢は、「単語」でもあり「文章」でもあるが、今回の分析においては「文章 (=単語ではない)」という扱いにした。とはいえ「関与しながらの観察」など、「……の……」でも「単語」扱いとすべきものはあるため、その点については問題ごとに判断した。

問 12 視床の機能として、最も適切なものを 1 つ選べ。

- ① 運動の学習 ② 呼吸の抑制 ③ 体温の調節
④ 感覚情報の中継 ⑤ 意識レベルの制御

→今回の分析では、選択肢を「文章」と判断した。

表 11 をグラフにまとめたものが、以下の図 3 である。

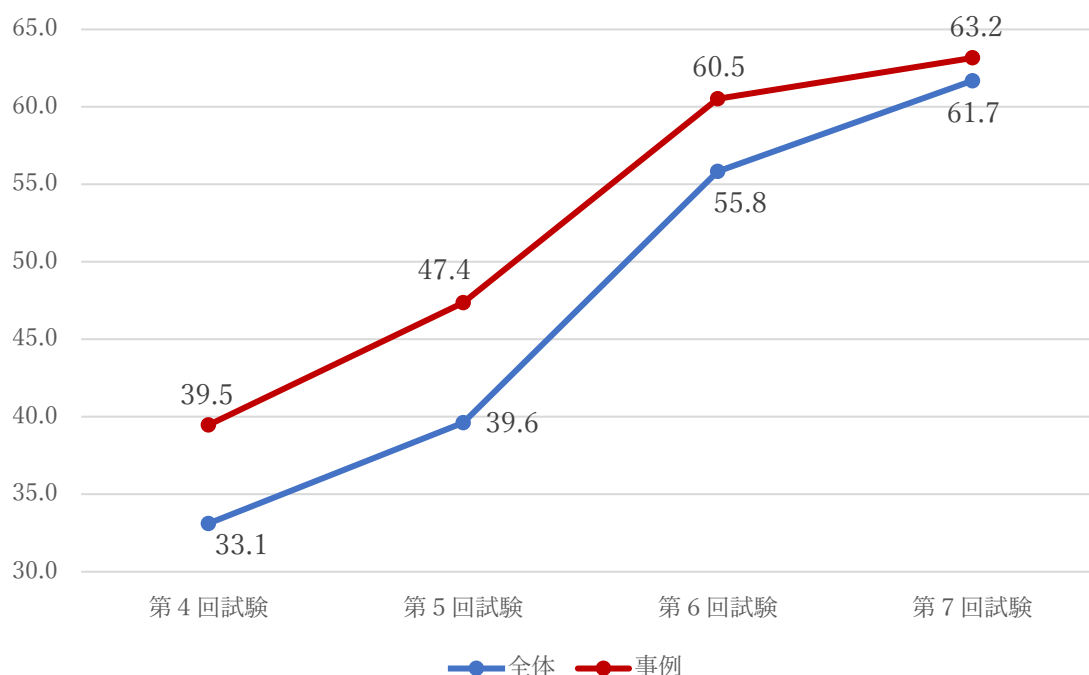


図 3 公認心理師試験 選択肢が「単語」の問題の割合推移 (単位: %)

もともと第 6 回試験から、あてはまる病態名、あてはまる心理検査名を答えさせる問題が増加傾向にあったが、第 7 回試験ではその傾向はさらに強まり、一般問題・事例問題ともに単語で答えさせる問題が増加している。

単語の問題の方が、問題について考えたり議論したりする要素が少なく、問題から得られる学びに、やや物足りなさを感じてしまう点は否めない。とはいえ国家試験はあくまで試験であり、そのような点を議論することは本質的ではない、と考えることもできる。

過去の試験と得点シミュレーションを比較したものが以下の表 12 で、正直「単語」で答えさせる問題が増えたからといって、問題が極端に易くなったということはないようである。ここでは「単語」の選択肢が増加していることについて、これ以上の議論は避けたいと思うが、みなさんは、果たしてどう思われるだろうか。

表 12 得点シミュレーション 各回比較

	第 3 回試験	第 4 回試験	第 5 回試験	第 6 回試験	第 7 回試験
予想得点	139.6 点	142.6 点	136.6 点	138.4 点	138.7 点

※予想得点…一般問題 1 点、事例問題 3 点とし、難易度 A 問題を 2 割、B 問題を 5 割、C 問題を 8 割正解していた場合の得点のこと。算出方法の詳細は本資料 9 ページを参照。

7. 出題分野別の講評

第7回公認心理師試験について「心理検査」「介入・技法」「障害・疾患・症状」「法律・制度・施設」の4つの観点から、多く出題されたキーワードの紹介と共に分野別の講評を述べる。

※注 出題回数のカウント方法

問題文（事例文や注意書き含む）、選択肢中に記載されたキーワードを集計。1つの問題に同じキーワードが複数回あった場合は、1つとカウントする。例えば問題文中に「抑うつ」とあり、同じ問題の選択肢に「抑うつ」とあったとしても、1つとしてカウントする。異なる問題、異なるキーワードであれば区別してカウントする。

A. 心理検査に関する出題

心理検査は、大項目⑭に該当する。以下の表13は、問題文・選択肢中に心理検査の名称が示された回数である。回数のカウント方法は、上記注を参照。例えば、第7回試験の間18は、①CARS、②Conners3、③LDI-R、④M-CHAT、⑤Vineland-IIと選択肢に5種類の検査名が示されているため「5回」とカウントしている。

表13 問題文・選択肢中に心理検査の名称が示された回数

第3回試験	第4回試験	第5回試験	第6回試験	第7回試験
21回	16回	31回	48回	54回

次に、第7回試験で出題された心理検査をまとめた表が、以下の表14である。

表14 第7回試験で出題された心理検査

回数	検査名
3回	WISC, Conners3
2回	BDI-II, M-CHAT, TEG, Vineland-II, WMS-R GHQ, CARS
1回	HDS-R, KABC-II, MMPI, IES-R, CAPS, LSAS-J, MAS AQ-J, SDS, STAI, ADOS-II, PARS-TR, POMS, SLTA GDS, KWCST, NEO-FFI, K6/K10, PDSS, CMI, GAD-7 RBMT, EPDS, ロールシャッハ・テスト, VPTA, LDI-R, PDS PHQ-9, PIL, SF-36, CES-D, EDI-2, TAS-20, VPI

※太字の検査は、今回の試験も含め、累計3回以上の出題となる検査。

※色がついている検査は、今回の試験で初出となった検査。

※今回、fMRIなどの脳画像検査も出題されたが「心理検査」ではないと判断し、表から除外した。

表 13 を見ると、明らかに心理検査の出題が増加傾向にあることがわかる。特に第 7 回試験では、ついに過去最多出題数であった第 2 回試験（50 回）を超えた。

しかし、その出題のされ方は第 2 回試験とは大きく異なる。第 2 回試験においては、カットオフ値（何点以上、あるいは何点以下は困難を持っているとみなすか）に関する出題や、検査の対象年齢に関する出題が多かった。そのため、第 2 回試験以降、心理検査の対策は「カットオフ値を覚える」「対象年齢を覚える」という点が重視されることになった。しかし、過去の公認心理師試験の受験生で、カットオフ値や対象年齢を覚えようとした人は納得してもらえと思うのだが、この勉強はあまりに負担が多く、あまりに果てがない。非常に受験生に負担を強いる内容だった。

だが、公認心理師試験は回を重ねるごとに、カットオフ値や対象年齢に関する問題は激減し、大半は以下の問題のように「臨床像から該当する心理検査を選択する」ことが求められている。

問 18 限局性学習症／限局性学習障害のアセスメントに用いられるツールとして、最も適切なものを 1 つ選べ。

- ① CARS ② Conners3 ③ LDI-R ④ M-CHAT ⑤ Vineland-II

そして、今回の第 7 回試験においては、カットオフ値や対象年齢に関する知識が必要な問題は1 問もなかった。「検査のカットオフ値と対象年齢」に必死になる時代は、終わりを告げたといっても良いだろう。

他のトピックとしては、2022 年 2 月にウェクスラー式検査の最新版 WISC-V の日本語版が発売され、今回の第 7 回試験で、ついに WISC-V が初出題された（問 61，問 92）。今回出題された問題は両問とも、WISC-V の細かい中身を知らずとも正答できる問題であったが、「今後は WISC-V に関する問題を出題します」という宣戦布告とも読み取れる。第 8 回試験以降の受験生は、WISC-V に関する知識を備えた上で試験を受けることが望ましいであろう。

なお、2022 年 8 月には、MMPI の最新版 MMPI-3 日本版も発売されているが、第 7 回試験においては MMPI-3 に関する出題はなく（MMPI とだけ出題されているが、正答とは無関係であった）、現状ではまだ MMPI-3 に対する準備は優先度が低いと思われる。

B. 介入・技法に関する出題

介入・技法は大項目⑮に該当する。過去の試験との比較は、以下の表 15 の通りである。

表 15 問題文・選択肢中に介入・技法の名称が示された回数

第 3 回試験	第 4 回試験	第 5 回試験	第 6 回試験	第 7 回試験
32 回	51 回	44 回	60 回	37 回

そして、第 7 回試験で出題された技法をまとめたものが、以下の表 16 である。

表 16 第 7 回試験で出題された介入・技法に関する用語

回数	用語名
3 回	認知行動療法, 心理教育
2 回	コンサルテーション, パーソンセンタード・ケア, リアリティ・オリエンテーション
1 回	ソーシャル・スキルズ・トレーニング, 関与しながらの観察 ナラティブ・アプローチ, 回想法, フォーカシング, ゲシュタルト療法 認知再構成法, フェルトセンス, 認知療法, 家族療法, 内観療法 マインドフルネス, ケース・フォーミュレーション, 系統的脱感作法 ストレス免疫訓練, シェイピング, 機能分析, エビデンスベースト・アプローチ, イメージ療法, 行動活性化療法 開発的カウンセリング, 行動的カウンセリング, 折衷的カウンセリング 治療的カウンセリング, 問題解決的カウンセリング

※太字の用語は、今回の試験も含め、累計 3 回以上の出題となる用語。

※色がついている用語は、今回の試験で初出となった用語。

表 16 を見ると、初出の用語は少なく、過去に出題歴がある用語が多いことがわかる。また、用語名こそ問題文に明記されていないが、過去に出題された用語の理解が問われる問題がいくつかあった。例えば、クライエント中心療法という表現はないものの、クライエント中心療法におけるセラピストの態度が問われている問 21、司法面接という表現はないものの、司法面接の考え方を活用することが重要となる問 72、合理的配慮という表現はないものの、その観点から選択肢を選ぶことが必要となる問 154 などが挙げられる。このように、公認心理師試験対策においては、用語を丸暗記するのではなく、内容の理解・納得した上で、上記のような問題が出題されたときに活用できることが望ましい。

C. 障害・疾患・症状に関する出題

障害・疾患・症状は大項目⑳・㉑に該当する。第7回試験で出題された障害・疾患・症状に関する用語をまとめたものが以下の表17である。

表17 第7回試験で出題された症状・障害に関する用語

回数	用語名
4回	うつ病（うつ状態・抑うつ）、発達障害（神経発達症群）、注意欠如多動症
3回	統合失調症、Alzheimer型認知症、限局性学習症（学習障害）
2回	自閉スペクトラム症、不眠、Lewy小体型認知症、糖尿病、せん妄、見当識障害 脱抑制型対人交流障害、短期精神病性障害、発達性協調運動症、トゥレット症
1回	（※1回のみ出題の用語は、過去の試験で出題があった用語のみ掲載） 知的障害、心的外傷後ストレス障害、感染症、社交不安症、前頭側頭型認知症 パニック症、反応性アタッチメント障害、解離性障害、過敏性腸症候群 高次脳機能障害、ディスレクシア、アレキシサイミア、遂行機能障害、情動麻痺 パーキンソン症状、広場恐怖、産後うつ病、生活習慣病、反抗挑発症 本態性高血圧症、B型肝炎、気分循環性障害、双極Ⅰ型障害、潰瘍性大腸炎 カタレプシー、誇大妄想、睡眠時無呼吸症候群、てんかん、ナルコレプシー むずむず脚症候群、共依存

※太字の用語は、今回の試験も含め、累計3回以上の出題となる用語。

※問題文や選択肢中に明記されている用語のみをまとめている。例えば、事例文の内容が明らかに「うつ」が疑われる内容であったとしても、事例文または選択肢の中に「うつ」という言葉が出て来なければ回数にはカウントしていない。

※事例文と選択肢の両方に「うつ」という言葉が出てくるなど、同じ問題で複数回示されている場合は、それらをまとめて1回分としてカウントしている。

第7回試験では、以下の問64のように、事例文から予想される障害・疾患・症状を選ぶ問題が非常に多く見られた。

問64 48歳の男性A、会社役員。昼間の強い眠気と倦怠感、集中力の低下などを訴え、精神科クリニックを受診した。（中略）

Aの病態の理解として、最も適切なものを1つ選べ。

- ① 睡眠時随伴症 ② ナルコレプシー ③ むずむず脚症候群
④ 睡眠時無呼吸症候群 ⑤ 概日リズム睡眠・覚醒障害

このような問題は他にも問65、問66、問67、問138、問141、問142、問143、問148

の計8回(!)登場した。このような問題を解くためには、ただ障害・疾患・症状の名前を知っているだけでなく、その症状・障害がどのような特徴を持っているのか、具体的な臨床像と共にイメージできることが必要となる。

また、精神疾患の名称は基本的に DSM-5 基準でおさえおくことが基本となる。2023 年に DSM の最新版「DSM-5-TR」の日本語版が発売され、DSM-5 の名称か DSM-5-TR の名称か、どちらを優先的に学ぶべきか迷うところではあるが、第7回試験 問 66 では、DSM-5 表記の「短期精神病性障害」(DSM-5-TR 表記では「短期精神症」)が出題されており、現時点では DSM-5-TR の名称にこだわる必要はないように思われる。

症状・障害の他のポイントとしては、これまで多く出題されているうつ病、統合失調症、発達障害、Alzheimer 型認知症、自閉スペクトラム症、注意欠如多動症 (AD/HD)、不眠 (睡眠障害)、知的障害、心的外傷後ストレス障害 (PTSD)、は、第7回試験でも (扱われ方の程度の差はあれ) 出題されていたことが挙げられる。

一方で、従来の試験で多く出題されていた強迫症、依存症、境界性パーソナリティ障害、神経性やせ症の出題が、今回の試験では出題がなかった。また、従来の試験で多く出題されていた精神疾患に該当する向精神薬の選択、そして向精神薬がもたらす副作用に関する内容は、今回の第7回試験に関しては1題のみの出題であった (問 32)。

D. 法律・制度・施設に関する出題

法律・制度・施設は大項目②が該当する。第7回試験で出題された法律・制度・施設をまとめたものが以下の表18である。

表18 第7回試験で出題された法律・制度・施設

回数	用語名
6回	児童相談所
3回	特別支援教育, 家庭裁判所, 個人情報保護(秘密保持義務), 通級による指導 少年院, 地域包括支援センター
2回	保護観察, 児童養護施設, 精神保健福祉センター, 児童自立支援施設
1回	(※1回のみ出題の用語は, 過去の試験で出題があった用語のみ掲載) 公認心理師法, ストレスチェック制度, 児童福祉施設, 少年鑑別所 労働基準法, いじめ防止対策推進法, 労働安全衛生法, 男女雇用機会均等法 高齢者虐待防止法, 労働者の心の健康の保持増進のための指針 DV防止法, 学習指導要領, 発達障害者支援法, 犯罪被害者等基本法 フォスタリング機関, 地域包括ケアシステム, 介護老人保健施設 児童心理治療施設, 自立援助ホーム, 職業安定法, 親権, 特別養護老人ホーム 医療計画, 母子生活支援施設, 労働契約法, 労働組合法

※太字の用語は, 今回の試験も含め, 累計3回以上の出題となる用語。

第7回試験に限った話ではないが、法律・制度・施設に関しては、難易度が高い問題が多く、点数を稼ぐことが難しい。さらに、法律・制度・施設の数膨大で、勉強しようと思うと、途方も無い量をこなさなければならなくなる。そのため、公認心理師試験を受験する上では、法律・制度・施設の問題は「わかる範囲で解く」ことは大切だが、深追いしすぎないことも大切だろう。複数回出題されている用語は、過去にも出題されている「定番」のものが多いため、やはり過去問を中心に学ぶことになるだろう。

なお第7回試験では、これまでの試験で多く出題されていた精神保健福祉法（および精神科病棟の入院形態：医療保護入院や措置入院など）や医療観察法の出題はなかった。

8. 総評

公認心理師試験が終わるたびに、X（旧 Twitter）を見ると、試験問題に対するさまざまな意見や感想、やや目を背けたくなるメッセージから、試験を終えた開放感に満ちたメッセージまで、受験生のさまざまな“叫び”と“生きた姿”が見えてくる。SNS が普及する前は、そういった受験生の姿を見ることはなかなか難しかったのだが、こうやって様々な姿を見ると、SNS の発展も悪くないものだと思わせてくれる。そう思っていた。

しかし、今回の第7回試験は違う。どこか違う。

X（旧 Twitter）を見ても、受験生の声はほとんど聞こえてこない。検索しても現れるのは有資格者が受験生を応援する声ばかりで、肝心の受験生の“叫び”や“生きた姿”が見えてこない。使用する SNS の問題？ いや、他の SNS でも同様のようだ。果たして、何が起きているのだろうか？ みなさんは、果たしてどこにいて、何を想っているのだろうか？

今、改めて、受験したみなさんの様子を、思い浮かべてみよう。

何人かの院生から聞いたエピソードに、少し想像を交えて、想いを馳せてみよう。

今年の公認心理師試験の受験生は、多くが心理系大学院を修了目前の大学院生で、1月に修論提出、2月に修論発表、3月に公認心理師試験…という、過酷なスケジュールの中で準備を進めなければならなかった。目の前のやるべきことに翻弄されて、3月に待ち受ける試験の準備が進まない。現任者ルートがあった頃よりも受験生が減り、必然的に情報の流通も少なくなる。3月に試験があると分かっているにもかかわらず実感がわかない。何もかもが中途半端な中で、修論提出後の1ヶ月前後の時間で慌てて試験対策をした受験生も多くいるだろう。

そして試験を終えたみなさんは今。どんな状態だろうか。

まだケースの引き継ぎが残っている人もいるだろう。4月からの進路が決まっていない人もいるだろう。もちろん誰もが、試験を終えてひと段落はしただろう。しかし、完全に足を止めることはできない。むしろ、大学院を出て、新たな世界に旅立つ準備をしなければならない。

受験生の戦いは、きっとまだ、続いているのだ。

色々なおとなの都合で、従来のカリキュラムに上乘せされる形で、公認心理師カリキュラムを学んでいるみなさんは、講義・ゼミ・レポート・ケース・学外実習・修士論文・就職活動・資格試験と、すべきことが山積していただろう。資格試験1つ終わったごときで、簡単

に「やりきった感」など出せるものか。そんな“叫び”も聞こえてきそう。学生生活が終わり、心理専門職としての旅立ちの日は近づいている。そう、旅はまだ、これからなのだ。

でも、そんなみなさんにこそ、ぜひ伝えたいことがある。

それは、ここを「味わう」こと。そして、ここを「楽しむ」こと。

食事を例に挙げると分かりやすいだろう。別の何かをしながらとる食事。忙しい中で無理やり済ませる食事。味わう余裕もないし、楽しむ余裕もない。食感や味わい、食材の彩りや香り、その時間を他人と共有する喜びや幸せ。本来ならば、そこに「ある」はずで、たくさんの「ここ」を動かしてくれるはずなのに。

どこかで、「ここ」を見失っていないだろうか。

この専門家を目指していたはずなのに。

だからこそ、改めて「ここ」を味わってほしいのだ。楽しんでほしいのだ。

クライアントのここと、自分自身のこの交流を。頼れる先輩や信頼できる仲間たちとの関わりを。心理学の書籍や論文、学会や研修会で出会う、新たな世界と自分にはない視点を。旅先で出会った様々な「ここ」を振り返り、そしてこれから出会う、たくさんの「ここ」を、味わい、楽しんで欲しい。

これからも、まだ旅は終わらない。あくまで公認心理師試験は通過点だ。その通過点を超えて、その先にある、素敵な「ここ」の世界を、ぜひ味わって、楽しんでほしい。

素敵な旅になることを、心から願っている。

.....。

さて、旅人を見送ったところで、私たちは次の旅人を待つことになる。ここから先は、旅人を見送り、次の旅人を待つ私の、少し長いひとりごとだ。

果たして公認心理師試験は、本当にこのままで良いのだろうか。

どこか公認心理師試験が「つまらない」ものになっていないだろうか。「こころ」を味わい、楽しむことが出来る試験になっているだろうか。

毎年、試験問題を解くたびに「今年は、どんな問題が出るのだろう」「今年は、どんな気づきや発見があるのだろう」とワクワクしている自分がいる。しかし、第6回試験あたりから、その感覚が薄れ、今年の第7回試験では、そのようなこころの動きが極めて少なかった。

現任者ルートの“熱狂”が終わり、受験生の数も落ち着いてきたことが原因かもしれない。もちろん、その要素もあるだろう。ただ、本分析を進める中で、それだけではないことが分かってしまった。

それが、本資料 11 ページで示した「単語の選択肢」の問題数だ。まさか、6割を超える問題の選択肢が、単語だけになっているとは思わなかった。比較するために過去の試験問題をみると、各選択肢に様々な「文章」があり、心底驚いた。そこには、試験作成者の様々な想いが込められているような気がした。

公認心理師試験は、いつのまにか、こんなに淡泊になっていたのだ。

心理学という学問は、わたしたちの「こころ」というよく分からない存在に対して、さまざまな“名前”を与え、学問として扱える形にしてきた。だからこそ「心理学を学ぶことは、心理学の用語を理解することである」ということは、間違いのないと思っている。だから単語の選択肢が、悪いわけではない。そういう問題は、確かに必要だろう。中には、じっくり問題文の内容を精査した上で、該当する用語を選ばせる良問も確かに存在している。

しかし「単語」を選ぶ問題は、その単語を知らなければ、考える舞台にも立たせてもらえないことがある。逆に知っていることで、考えるまでもなく正解を選ぶことができってしまうこともある。考えさせてもらえないこと。それは、ひとことで言ってしまうえば、実に「つまらないこと」ではないだろうか。

そして、どうしても頭をよぎってしまう。河合塾 KALS で模擬試験を作っているから分かる。単語で選択肢を作る方が、楽だし、短時間で作成できる。安全で、クレームの少ない問題を作成できる。時間に追われているのは、受験生たちだけではない。試験作成者もまた、時間に追われているのでは？ 大切なものを見失いつつあるのでは？ ここまで考えるのは邪推だろうか？

現任者ルートの時のような“熱狂”を望んでいるわけではないし、あの時代はもう帰ってこない。そうじゃない。ただ単にあてはまる言葉を選んでいくだけの試験ではなく、もっと、色々考えながら、新たな出会いにワクワクしながら、試験問題に取り組みたいのだ。もちろんそれは身勝手な欲望だ。受験生からしたら、考える問題や議論が起こるような問題は、むしろ迷惑かもしれない。受験生は楽しむために試験を受けに行っているわけではない。「つまらない」ことの何が悪いのか。国家試験は、資格を与えるか否かを判断する試験で、ワクワクさせる試験などではない。試験として成立していること、きちんと能力を判断することが大切で、ワクワクするかとか、問題から得られる学びとか、そこから巻き起こる議論とか、そんなものは本質ではない。それは分かっている。それでも。

……。

いつの間にか熱が入りすぎてしまったようなので、一旦ここで打ち切ろう。

いずれにせよ、私たちは今後も公認心理師試験の受験生を応援していくし、できれば受験を終えた人にも、また再び試験問題を解いて、新たな気づきや発見を得てほしいと考えている。そのための講座や、今回のような分析も続けていく。今後も河合塾 KALS の「講義力×情報力」に、ぜひご期待頂きたい。

2024 年度の分析速報は、以上である。かなりの長文となってしまったが、最後まで読んで頂いたことに心より感謝したい。みなさんの今後に、幸あらんことを。

2024 年 3 月 7 日 河合塾 KALS 宮川 純

9. 巻末資料 第7回公認心理師国家試験 各設問分析

BP…ブループリント大項目の番号。

難度…問題の難易度がどの程度であったか。

- 難易度A…5つの中から完全にランダムで選ばざるを得ない難問。
- 難易度B…正解の選択肢を2つまたは3つまで絞り込むことが出来る問題。
- 難易度C…比較的正確を1つに絞り込みやすい問題。

解答形式…マークシートを塗りつぶす内容はどうか。

- 5肢択一 …5つの選択肢から1つを選ぶ形式。
- 4肢択一 …4つの選択肢から1つを選ぶ形式。
- 5肢択二 …5つの選択肢から2つを選ぶ形式。

選択内容…どのような内容を正解として答えるか。

- 適切選択…「最も適切なものを選びなさい」などの形式。
- 不適切選択…「最も不適切なものを選びなさい」などの形式。

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
1	①	個人情報の取り扱いに関する用語	B	5肢択一	適切選択
2	③	チーム医療に関する用語	B	5肢択一	適切選択
3	③	問題文に該当する専門職の名称	B	5肢択一	適切選択
4	④	習慣強度を設定し行動を説明した心理学者	B	5肢択一	適切選択
5	⑦	知覚に関する用語	C	5肢択一	適切選択
6	⑤	印象やイメージの評定方法	B	5肢択一	適切選択
7	⑥	実験に関する用語	C	5肢択一	適切選択
8	⑦	脳機能計測技術	A	5肢択一	適切選択
9	⑦	記憶に関する用語	C	5肢択一	適切選択
10	⑧	学習に関する用語	C	5肢択一	適切選択
11	⑨	感情に関する用語	B	5肢択一	適切選択
12	⑩	視床の機能	A	5肢択一	適切選択
13	⑩	高次脳機能障害の原因	A	5肢択一	適切選択
14	⑪	自他の関係性についての通念を表す用語	B	5肢択一	適切選択
15	⑫	N. Eisenberg の向社会的道德判断	B	5肢択一	適切選択
16	⑭	高次脳機能の神経心理学的アセスメント	A	5肢択一	適切選択
17	⑫	高齢者の適応に関する理論	C	5肢択一	適切選択
18	⑭	限局性学習症のアセスメントツール	C	5肢択一	適切選択
19	⑭	全般不安症が疑われる成人への心理検査	C	5肢択一	適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
20	⑮	内観療法における集中内観	C	5 肢択一	適切選択
21	⑮	C. R. Rogers のパーソナリティ変化の必要十分条件	B	5 肢択一	適切選択
22	⑯	感情の認知や想像の困難さを表す用語	C	5 肢択一	適切選択
23	⑭	QOL を測定する包括的尺度	A	5 肢択一	適切選択
24	⑰	高齢者の状態を表す用語	C	5 肢択一	適切選択
25	⑱	R. Rosenthal の提唱した用語	C	5 肢択一	適切選択
26	⑫	神経発達症群の中であてはまる病態	C	5 肢択一	適切選択
27	⑱	教育評価	C	5 肢択一	適切選択
28	㉑	該当する臓器の名称	B	5 肢択一	適切選択
29	㉑	止血に関わる血液中の成分	B	5 肢択一	適切選択
30	㉑	HbA1c が管理の指標に用いられる疾患	A	5 肢択一	適切選択
31	⑭	摂食障害患者の症状評価のための心理検査	B	5 肢択一	適切選択
32	㉒	向精神薬と副作用	C	5 肢択一	適切選択
33	㉓	民法上の絶対的扶養義務者	B	5 肢択一	適切選択
34	㉔	ボールダー会議で示された心理職のモデル	C	5 肢択一	適切選択
35	⑰	高齢者支援における公認心理師の業務	C	5 肢択一	不適切選択
36	⑬	発達障害者支援法における発達障害	C	5 肢択一	不適切選択
37	⑭	心理的アセスメントにおける人物画の表現の取扱	C	5 肢択一	不適切選択
38	⑮	セラピストの傾聴を説明するための概念	B	5 肢択一	不適切選択
39	⑰	フォスタリング機関の業務	B	5 肢択一	不適切選択
40	⑰	母子生活支援施設	B	5 肢択一	不適切選択
41	⑰	性犯罪再犯防止指導	B	5 肢択一	不適切選択
42	⑯	トータル・ペインの 4 つの側面	C	5 肢択一	不適切選択
43	①	職業倫理に配慮した公認心理師の対応	C	4 肢択一	適切選択
44	⑧	N. Tinbergen による動物の行動の原理	A	4 肢択一	適切選択
45	⑮	身体感覚に注意を向けるアプローチ	C	4 肢択一	適切選択
46	⑱	小・中学校学習指導要領	B	4 肢択一	適切選択
47	⑬	特別支援教育	C	4 肢択一	適切選択
48	㉓	教育機会確保法	C	4 肢択一	適切選択
49	㉒	言語症/言語障害	B	4 肢択一	不適切選択
50	⑬	特別支援教育コーディネーター	B	4 肢択一	不適切選択
51	㉓	いじめ防止対策推進法	B	4 肢択一	不適切選択
52	②	E. Rodolfa の心理職の機能コンピテンシー	B	5 肢択二	適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
53	⑤	遺伝と環境及びそれらの交絡を検討する手法	B	5 肢択二	適切選択
54	⑮	ナラティブ・セラピー	B	5 肢択二	適切選択
55	⑲	家庭裁判所調査官の業務	B	5 肢択二	適切選択
56	⑳	職場復帰支援	B	5 肢択二	適切選択
57	㉑	モルヒネの三大副作用	A	5 肢択二	適切選択
58	㉓	高齢者虐待防止法	B	5 肢択二	適切選択
59	⑤	分散分析における独立変数の設定	B	5 肢択一	適切選択
60	⑫	1 歳 5 か月男児・M. S. Mahler の理論による理解	B	5 肢択一	適切選択
61	⑭	8 歳男児・アセスメントのフィードバック	C	5 肢択一	適切選択
62	⑫	64 歳男性・J. Bowlby の喪の作業の 4 段階	B	5 肢択一	適切選択
63	⑯	30 歳男性・J. O. Prochaska の多理論統合モデル	C	5 肢択一	適切選択
64	⑯	48 歳男性・事例文の内容に基づく病態の理解	B	5 肢択一	適切選択
65	㉒	22 歳男性・事例文の内容に基づく病態の理解	B	5 肢択一	適切選択
66	㉒	29 歳女性・事例文の内容に基づく病態の理解	C	5 肢択一	適切選択
67	⑯	63 歳女性・事例文の内容に基づく病態の理解	B	5 肢択一	適切選択
68	⑲	14 歳男子・入所している施設名	B	5 肢択一	適切選択
69	⑫	5 歳女兒・背景にある幼児期特有の心理的特徴	B	5 肢択一	適切選択
70	⑲	67 歳男性・優先的に連携する機関	B	5 肢択一	適切選択
71	⑱	14 歳男子・いじめに対する校内委員会の対応	B	5 肢択一	不適切選択
72	⑰	10 歳女兒・面接者が面接の過程で行う対応	C	5 肢択一	不適切選択
73	⑱	23 歳男性・担任教師へのコンサルテーション	C	4 肢択一	適切選択
74	⑰	80 歳女性・地域包括支援センターの支援	B	5 肢択二	適切選択
75	㉒	25 歳男性・状態に関係が深い症状	B	5 肢択二	適切選択
76	⑱	24 歳男性・担任教師へのコンサルテーション	C	5 肢択二	適切選択
77	㉒	33 歳女性・仕事上の問題と家庭での DV 疑い	B	5 肢択二	適切選択
78	①	タラソフ判決と職業倫理	C	5 肢択一	適切選択
79	②	対人援助職のコンピテンシー	C	5 肢択一	適切選択
80	④	移行対象の概念を提唱した人物	C	5 肢択一	適切選択
81	⑦	記憶に関する用語	B	5 肢択一	適切選択
82	⑯	有効成分を含まない薬剤による効果	C	5 肢択一	適切選択
83	⑤	測定値の分散に対する真値の分散の割合	B	5 肢択一	適切選択
84	⑥	心理学実験におけるノンパラメトリック検定	A	5 肢択一	適切選択
85	⑦	ウェーバーの法則	C	5 肢択一	適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
86	⑧	学習におけるシェイピングの機能	B	5 肢択一	適切選択
87	⑧	言語能力の生得性と関係が深い概念	C	5 肢択一	適切選択
88	⑩	神経伝達物質	A	5 肢択一	適切選択
89	⑪	説得的コミュニケーションに関する理論	B	5 肢択一	適切選択
90	⑫	知覚狭小化の例に対する解釈	B	5 肢択一	適切選択
91	⑫	A. L. Gesell の提唱した学説	C	5 肢択一	適切選択
92	⑭	AD/HD のアセスメントのための心理検査	C	5 肢択一	適切選択
93	⑮	面接法	C	5 肢択一	適切選択
94	⑭	面接式が必須ではない心理検査	C	5 肢択一	適切選択
95	⑮	クライアントの問題に関する仮説	C	5 肢択一	適切選択
96	⑪	社会心理学に関する用語	C	5 肢択一	適切選択
97	⑮	認知療法におけるセラピストの治療姿勢	B	5 肢択一	適切選択
98	㉑	緊張型頭痛	A	5 肢択一	適切選択
99	㉑	生活習慣病	B	5 肢択一	適切選択
100	㉑	細菌が原因で起こる感染症	A	5 肢択一	適切選択
101	⑯	マタニティ・ブルーズ	B	5 肢択一	適切選択
102	⑯	覚せい剤の再使用	C	5 肢択一	適切選択
103	⑰	高齢者の入所施設	A	5 肢択一	適切選択
104	⑰	高齢者のクライアントに対する心理支援	C	5 肢択一	適切選択
105	㉒	労働者の内発的動機づけ	C	5 肢択一	適切選択
106	㉑	ホルモン	B	5 肢択一	適切選択
107	⑩	交感神経が優位になると起こる現象	C	5 肢択一	適切選択
108	㉒	意識混濁などの症状に該当する状態名	C	5 肢択一	適切選択
109	㉓	医療計画制度	A	5 肢択一	適切選択
110	㉓	基本的な労働条件について定めた法律	B	5 肢択一	適切選択
111	⑱	一次的援助サービス	C	5 肢択一	適切選択
112	①	公認心理師法	C	5 肢択一	不適切選択
113	㉓	精神保健福祉センターの業務	B	5 肢択一	不適切選択
114	⑫	自閉症児にみられる主要な特徴	C	5 肢択一	不適切選択
115	⑮	エビデンスに基づく実践	C	5 肢択一	不適切選択
116	㉓	児童養護施設運営指針	B	5 肢択一	不適切選択
117	㉓	児童相談所の基本的機能	B	5 肢択一	不適切選択
118	㉓	親権	A	5 肢択一	不適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
119	⑭	再犯の防止等の推進に関する法律	B	5 肢択一	不適切選択
120	⑳	働き方改革関連法	A	5 肢択一	不適切選択
121	㉓	DV 防止法	B	5 肢択一	不適切選択
122	㉐	男女雇用機会均等法	B	5 肢択一	不適切選択
123	⑬	通常学級に在籍する児童生徒への特別支援教育	B	4 肢択一	適切選択
124	⑪	M. Bowen らの家族療法の中心的着眼点	B	4 肢択一	適切選択
125	⑪	E. L. Deci らの自己決定理論	A	4 肢択一	適切選択
126	⑩	安静覚醒閉眼時に出現する脳波の成分	B	4 肢択一	適切選択
127	㉒	DSM-5 の過食性障害	B	4 肢択一	適切選択
128	㉓	ハーグ条約実施法	B	4 肢択一	適切選択
129	㉒	DSM-5 における抑うつエピソード	C	5 肢択二	適切選択
130	⑮	地域包括ケアシステム	B	5 肢択二	適切選択
131	⑱	プログラム学習の要件	B	5 肢択二	適切選択
132	⑰	少年院における特定生活指導	A	5 肢択二	適切選択
133	㉐	J. L. Holland の六角形モデル	A	5 肢択二	適切選択
134	㉓	犯罪被害者等基本法	A	5 肢択二	適切選択
135	⑮	ソーシャル・スキルズ・トレーニング	B	5 肢択二	適切選択
136	⑥	実験内容が明らかにする現象	C	5 肢択一	適切選択
137	⑫	1 歳 6 か月女児・愛着の形成	C	5 肢択一	適切選択
138	⑰	65 歳男性・事例文の内容に基づく病態の理解	C	5 肢択一	適切選択
139	⑰	21 歳女性・病態評価のための心理検査	C	5 肢択一	適切選択
140	⑮	25 歳男性・精神分析の概念を用いた検討	C	5 肢択一	適切選択
141	㉑	20 歳男性・事例文の内容に基づく病態の理解	B	5 肢択一	適切選択
142	⑰	40 歳女性・事例文の内容に基づく状態の理解	C	5 肢択一	適切選択
143	㉒	9 歳男児・DSM-5 に基づく病態の理解	C	5 肢択一	適切選択
144	⑰	55 歳男性・地域包括支援センターの対応	B	5 肢択一	適切選択
145	⑱	17 歳女子・現在の状態を説明する概念	C	5 肢択一	適切選択
146	⑭	10 歳男児・アセスメントのための心理検査	C	5 肢択一	適切選択
147	㉐	35 歳女性・ストレスチェックの結果	C	5 肢択一	適切選択
148	⑯	8 歳女児・事例文の内容に基づく病態の理解	C	5 肢択一	適切選択
149	⑮	29 歳女性・認知行動療法	B	5 肢択一	不適切選択
150	⑰	13 歳男子・家庭裁判所による処分	A	5 肢択一	不適切選択
151	㉐	30 歳女性・社内の心理相談室への来談	C	5 肢択一	不適切選択

問	BP	問題内容	難度	解答形式	選択内容
152	⑭	21 歳男性・実施する心理検査	B	5 肢択二	適切選択
153	⑰	11 歳男児・地域小規模児童養護施設の対応	C	5 肢択二	適切選択
154	⑱	9 歳女児・授業に参加できる読み書きの支援	B	5 肢択二	適切選択

※表中の難易度や分類などは，河合塾 KALS の独自の判断によるものです。個々の理解や価値観により，難易度や分類は異なります。あくまで参考に留めて頂きたいと思います。

※本資料の無断転載・無断転用を禁じます。